

郵便の不安たち

東浩紀

朝日新聞社

郵便的不安たち

江苏工业学院图书馆
藏书章

東浩紀

一九七一年東京都生まれ。東京大学教養学部卒業。同大学院総合文化研究科博士課程修了。学術博士。現在、日本学術振興会特別研究員。専攻は哲学および表象文化論。著書に『存在論的、郵便的ジャック・デリダについて』（新潮社）。

郵便的^{ゆうびんてきふ}不安^{あん}たち

一九九九年八月一日 第一刷発行

著者 東浩紀^{あずまひろき}

発行者 岡本行正

発行所 朝日新聞社

編集・書籍編集部 販売・出版販売部

〒一〇四・八〇一一 東京都中央区築地五・三・二

☎〇三・三五四五・〇一三一（代表）

振替・〇〇一〇〇・七・一七三〇

凸版印刷

©Azuma Hiroki 1999

Printed in Japan

ISBN4-02-257404-6

定価はカバーに表示してあります

印刷所

郵便的不安たち

目次

棲み分ける批評(1999) ————— 9

郵便的不安たちー『存在論的、郵便的』からより遠くへ(1998/1999) ————— 22

I

ソルジェニーツィン試論ー確率の手触り(1991/1993) ————— 71

写生文的認識と恋愛(1993/1994) ————— 97

精神分析の世紀、情報機械の世紀ーペンヤミンから「無意識機械」へ(1996) ————— 118

II

庵野秀明は、いかにして八〇年代日本アニメを終わらせたか(1996) ————— 131

アニメ的なもの、アニメ的でないもの(1996) ————— 150

『エヴァ』にはまるのはなぜ? (1996) ————— 160

オタクから遠く離れて(1997) ————— 162

● 文芸時評 (1996-1997/1997)

一九九七年一月	179
一九九七年二月	187
一九九七年三月	195
一九九七年四月	202

● 季評 (1997-1998/1997-1999)

第一回	How to make readers sympathetic with words. (一九九七年春)	210
第二回	How to make readers sympathetic with words. II (一九九七年夏)	215
第三回	『THE END OF EVANGELION』をめぐる対談 (一九九七年秋)	221
第四回	エヴァについての一年半再考 (一九九七年冬)	227
第五回	隠喩と批評について—あるいは九〇年代について (一九九八年春)	233
第六回	ベル友からの返信—九〇年代について 2 (一九九八年夏)	239
第七回	『批評空間』座談会追記—九〇年代について 3 (一九九八年秋)	245
第八回	徹底化されたポストモダン—九〇年代について 4 (一九九八年冬)	251

寓話を超えて(1997)―阿部和重との対談 ――― 257

批評ばかりが増殖する―芳川泰久氏への応答(1997) ――― 263

暗号と言霊(1997) ――― 272

リキテンスタイン／エクリチュール(1998) ――― 275

●「書くこと」と周到さ―阿部和重『アメリカの夜』への書評(1994) ――― 278

●「読みにくい」ラカン解説書―赤間啓之『ユートピアのラカン』への書評(1995) ――― 280

●私たちはいま、八〇年代を清算しつつある

―上野俊哉『シチュアション―ポップの政治学』への書評(1996) ――― 282

●ヴァルター・ベンヤミン、圧縮されたエッセイスト

―鹿島茂『「パサージュ論」熟読玩味』への書評(1996) ――― 286

●それにしてもメディア論はなぜこんなに困難なのか

―桂英史『インタラクティヴ・マインド―近代図書館からコンピュータ・ネットワークへ』

マイケル・ハイム、『仮想現実のメタフィジックス』

大澤真幸『電子メディア論―身体の変容』への書評(1995) ――― 290

●書くこと、読むこと、傷つくこと―多和田葉子『ゴットハルト鉄道』への書評(1996) ――― 295

●書くこと、読むこと、傷つくことII―多和田葉子『聖女伝説』への書評(1996) ――― 297

●面白くなさ、あるいは意匠化された「政治」への抵抗

―ジャック・デリダ『ジャック・デリダのモスクワ』への書評(1996) ――― 299

- ジジエクはなぜかくも軽快なのか
—スラヴォイ・ジジエク『為すところを知らざればなり』への書評(1997) ————— 302
- 柄谷行人について—柄谷行人『探究』の紹介(1997) ————— 306
- 雨音に寄生する文字たちのように—筒井康隆『敵』への書評(1998) ————— 310
- 柄谷行人についてII—柄谷行人『ヒューモアとしての唯物論』文庫版への解説(1998/1999) ————— 315
- Socrate non-performatif—Jacques Derrida+Peter Eisenman『Chora L. works』への書評(1998/1999) ————— 322

IV

- トランスクリプティークと(しての)脱構築—浅田彰・大澤真幸・柄谷行人との座談会(1998) ————— 333
- 記憶しつつ批評すること、それが思考の倫理である—王寺賢太との対談(1998) ————— 406
- 交通空間から郵便空間へ—田中純との対談(1998) ————— 418
- 考えなくって、大丈夫!?—宮台真司との対談(1998/1999) ————— 454

あとがき ————— 469

初出一覧 ————— 473

装幀 矢萩喜從郎

郵便的不安たち

棲み分ける批評

「批評」という言葉はいまや形骸化している。つまり現在書かれている批評文は、かつて小林秀雄に象徴されていたような知的かつ社会的な機能を失っている。おそらくこのような実感は、いま論壇誌や文芸誌を手にする読者の多く、そして何よりも少なからぬ書き手と編集者たちに共有されている。ならば、その形骸化はなぜ生じたのか。私たちはそろそろ、そのように率直に問うべきだと思われる。

1

文芸誌の世界、すなわち文芸批評を例に取ろう。九〇年代の文芸批評はひとことでは言え、アカデミズムとジャーナリズムへの激しい二極化で特徴づけられていた。状況を簡単に俯瞰しておこう。一方で批評のアカデミズム化は、主に、八〇年代半ばにポストモダンニズムの洗礼を受けた三〇代の書き手、とりわけ大学の文学研究者たちに担われ進んできた。ここでアカデミズムとは、旧来の学問的厳密さというより、むしろかつてのニューアカを継承した柔らかいスタイル、数年前のベストセラーのタイトルを借りれば「知の技法」のことを意味している。そこで書かれる批評文は、ラカン派精神分析や脱構築からカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル

批評に至るまでさまざまな学問的意匠で裝飾され（それらのあいだには立場の違いもあるが、それらがすべて「意匠」であることは変わらない）、結果として読者を著しく限定することになった。したがってそれらの文章は、たとえ文芸誌を発表の場としていても、むしろ『批評空間』や『現代思想』のような思想誌の動向と密接に係書かれている。この種の仕事は確かに高い知的緊張に支えられているが、残念ながら、いまや社会的効果を失っている——あるいはその意図的な無視のうえに成立していると言つてよい。

他方で批評のジャーナリズム化は、主に九〇年代初めに活躍を始めた職業的な文芸評論家に担われてきた。福田和也や斎藤美奈子に代表されるその傾向は、逆に、上述したような学問的意匠への反発を背景に登場している。その反発は彼らが書く批評文の通奏低音をなしているが（例えば福田が大和歌の価値を称揚するのは、その現れだと考えられる）、むしろここで重要なのは、それがまた批評家としての彼らの態度をも深く決定していることである。批評文の意匠的かつ閉鎖的な洗練に反発する彼らは、半ば必然的に、文章そのものの強度より読者への現実的效果を重視する。つまり彼らの批評活動はもはや書かれたものの内部にとどまらず、その外部をも巻き込み行われる。実際ここ数年の福田や斎藤の活動で最も印象に残るのは、特定の評論の内容というより、むしろ彼らが現れた媒体の多様さ、論壇誌から一般週刊誌や女性誌、ミニコミ誌まで含む乱雑さである。したがって彼らの仕事は、社会的効果への強い自覚に支えられているにもかかわらず、あるいはそれゆえに、批評文そのものの知的緊張を半ば意図的に欠いている。言い換えれば彼らの批評行為は、書かれたものの内容よりその効果、メッセージよりもむしろそれが伝えられるメディアを重視する選択として成立している。

アカデミックな批評には社会的緊張がなく、逆にジャーナリスティックな批評には知的緊張がない。つまり前者にはメディアの意識がなく、後者にはメッセージの意識がない。言うまでもなくこの二極化自体、批評を多少は貧しくしている。しかしここでより重要なのは、九〇年代ではその両者が単純に対立するのではなく、むしろ相

補的な役割を担って共存しているという奇妙な状況である。二つの批評のその棲み分けは、例えば浅田彰と福田和也の関係を考えれば分かりやすい。一方で浅田は八〇年代の半ば以来、一貫してポストモダニズムの代表的論客として知られてきた。日本ではしばしば誤解されているが、彼が紹介した「ポストモダニズム」とはもともと、六八年のパリ五月革命を準備した（あるいはその影響を受けた）強い左翼的政治性を備えた思想を指している。したがって浅田の革新的立場は当初から明らかであり、とりわけ九〇年代の彼は、左翼知識人としての役割を積極的に引き受けてきたと言ってよい。他方で福田は、「新保守」の代表的論客として知られている。彼は自ら右翼を任じており、九〇年代には、かつてポストモダニストたちが批判した伝統的価値を積極的に擁護することで影響力を強めてきた。したがって本来ならば（彼らの主張を真面目に受け取るならば）、ほぼ同世代のこの二人の批評家は、政治的にも文化的にも激しく対立するはずだと考えられる。しかし実際にはここ数年、座談会などで出会った彼らはほとんど意見の対立を見ていない。むしろ彼らはたがいの異なる役割を認めあい、対立を相対化するため共同して振る舞っているようにも思われる。この曖昧な共存は、まさに上述の棲み分けにより可能にされている。浅田は批評的メッセージを発信し、福田はメディアを介した批評的介入を実践する。前者が左翼で後者が右翼であることは、その役割分担をいささかも妨げない。裏返せばその分担の意識は、浅田と福田、『批評空間』と新保守の対立を無化する装置として機能している。右翼／左翼の対立が九〇年代の批評的言説を俯瞰する軸となりえないのは、ひとつにはこのような無化作用が随所で働いているからである。したがって現在の批評家の位置は、メッセージ上での対立ではなく、むしろアカデミズムとジャーナリズムの分離、メッセージ的批評とメディア的批評の棲み分けを指標として測られねばならない。その棲み分けのメカニズムは、いまや旧来のイデオロギー対立よりも強いのだ。

冒頭に述べた批評の形骸化は、文芸誌（およびそれと連動する思想誌や専門誌）の世界ではまさにこの棲み分け

に起因している。というのもそれは裏返せば、知的緊張と社会的緊張を同時に担った批評が現れることを妨げる、あるいはそのような批評が書かれない状況を追認する構造にはかならないからである。メッセージ的強度とメディア的戦略を区別し、それぞれ別の役割のもとに振り分けるこの状況においては、必然的に、その棲み分けを攪乱すること、つまり批評的なメッセージを批評的に流通させることが最も難しい課題として現れるだろう。九〇年代のほとんどの書き手はその課題を試みず、むしろそれに触れないこととでたがいに共存してきた。このような条件が、かつて小林秀雄が代表していた（少なくともそう社会的に信じられていた）「批評」の機能から遠く離れていることは明らかである。小林は何よりも美文家だったが、他方で、その効果をジャーナリズムからの距離で測るバランスをつねに強調していた。例えば彼は三〇年代のあるエッセイで、西田幾多郎に触れつぎのように述べている。西田の思考は本物であり、その難解な文章も強度に満ちている。しかし小林はその強度を「健全」でないと考える。というのもそこには「見物と読者」が、つまりメディアを介した他者との相互応答が欠けているからだ。「西田氏は、たゞ自分の誠實といふものだけに頼つて自問自答せざるをえなかつた。自問自答ばかりしてゐる誠實といふものが、どの位惑はしに充ちたものかは、神様だけが知つてゐる」¹。メッセージの強度はメディアとの相互応答なしには健全でいられない——昭和初期の大衆社会と都市文化を背景に現れた小林にとって、これは批評家としての一貫した信念だった。そしてこの基準に照らせば、現在の批評は確かに健全さを失っている。

しかし私たちはここで、その「健全さ」の重要性を必要以上に強調すべきでない。批評のあるべき姿（それは必ずしも小林でなくてもよい）を過去に見出し、その基準から現在の批評家たちを断罪することはきわめてたやすい。しかし過去と現在の距離を利用したそのようなレトリックは、実際は思考停止の現れにすぎない。例えば最近の柄谷行人は、随所で「誰々の批評は批評ではない」といった発言を繰り返している。たとえ真摯な危機意識

に支えられていようと、批評のあるべき姿を暗黙に前提としたそのような断言は、必ず不毛な党派性に帰着する。私がここで批評の棲み分けを問題としているのは、まさにその不毛さを回避するためである。私は批評の形骸化、すなわち小林的「健全さ」の喪失を批評家の能力不足のためとは考えない。私はむしろその点については、九〇年代の批評がきわめて多様なあり方をしてきたこと、つまり批評の複数化を素直に認めるべきだと思われる。福田のメディア戦略も浅田のメッセージも、あるいはよりアカデミックな思想的論文も、いまやそれぞれの文脈でそれぞれ批評的に機能している。この状況そのものには問題がないし、そこに狭い党派性を持ち込む必要もまったくない。にもかかわらず、あるいはだからこそ、もし私たちがその状況を全体として「批評の形骸化」と感じるのだとすれば（私はその前提からこの文章を始めている）、その原因はもはや個々の批評ではなく、それら複数の批評を棲み分け共存させる状況、メッセージとメディアの分割という条件にこそあると考えねばならないと思われる。つまり私たちはここでは、批評のあるべき姿ではなくむしろその条件を、浅田や福田の取る個々の戦略ではなく、むしろ彼らが対であることを問題とせねばならない。浅田が書かないことも、逆に福田が書きすぎることも、私たちはともに彼らなりの批評的実践と認めてよい。しかし彼らが相補的に振る舞っているかぎりにおいて、その実践はつぎの瞬間には無効化される。批評の形骸化はそこから生じたのであり、したがって私たちはそのメカニズムについて考える必要があるだろう。ならばメッセージ的強度とメディア的戦略、アカデミズムとジャーナリズムのその棲み分けは、いったいなぜかくも強力に機能しているのか。つまりこの社会では、批評的なメッセージがなぜ批評的に流通しないのか。

残念ながら私はこの短い文章では、それらの問いに十分詳しく答えることができない。ここでは二つの視点を提出し、読者の注意を促すことととりあえず満足しておきたいと思う。

まず第一にその棲み分けは、当然九〇年代の社会的・文化的環境を反映している。その環境をここでは簡潔に、徹底されたポストモダンと名づけておこう。しかし、なぜ「ポストモダン」か。

よく知られるようにこの言葉は、日本では八〇年代に一時流通したのち、九〇年代初めに力を失い急速に忘れられた。一部の論者はこのことから、九〇年代の文化を「ポストモダン以後」とも捉えている。しかしその名称は正確でないだけでなく、ここ二〇年間の一貫した文化的傾向を見えにくくすると思われる。九〇年代初めに力を失ったのは実際には、かつて「ポストモダン」と呼ばれた文化的モード、「新人類」と呼ばれた人々が取っていた特定の消費行動にすぎない。宮台真司の調査が裏づけたように、そのモードは確かにバブル崩壊とともに支持者を失っている。九〇年代におけるオタク系文化の隆盛はその反動として生じるのであり、事実その変化は論壇では、宮台自身と大塚英志の登場（そしてその裏面をなす新人類系ライターたちの低迷）に見事に反映されていると言つてよい。しかしこの変化はモードの表面的推移にすぎず、本来「ポストモダン」と呼ばれるべき深層の傾向には関係がない。というのも七〇年代末にジャン・フランソワ・リオタールがこの言葉を用いたのは、特定の新たな文化的モードに注目するためではなく、むしろ逆に、複数のモードが混在し、どれもが支配的になることなく並立し続ける文化状況の到来を警告するためだったからである。そしてこの本来の意味においてならば、